



一般社団法人
大学女性協会
東京支部会報

- TOMOSHIBI -
Journal of Tokyo Chapter
Japanese Association of
University Women
<http://www.jauw.org>

一年を振り返って

支部長 森川 淳子

令和の時代になりました。10月の即位の礼では、平安時代にタイムスリップしたかのような感覚になりました。大嘗宮も先例に倣い作り上げました。伝統を受け継いでいくことは、大事なことでないかと思いました。

東京支部は今年度、講演会2回、勉強会、見学会1回などを開くことができ、多くの方にご参加いただきました。講演会講師をお願いした南極越冬隊で活躍された鈴木裕子氏、守田科学奨励賞に選ばれた久保麦野氏は、東京支部推薦の国内奨学生でした。今年度も国内奨学生に、東京支部から推薦した5名が選ばれ、新春のつどいの席で、奨学金の贈呈式が行われました。



中家晶瑛さんにチャレンジ奨学金を贈呈

東京支部のチャレンジ奨学金も、企業に勤務していた時に外国人との言葉の壁を感じ、中国語を学び直すという学生にさ

学ぶよろこび・育つたのしみ、ふたたび —感謝と提案—

大学女性協会 会長 鷺見八重子

おとしJAUWの奨学金事業70周年を記念し、国内奨学委員会が『学ぶよろこび 育つたのしみ』と題した小冊子を作成しました。この10年間の奨学生たちが日本と世界の各地から奨学事業への感謝の思いや、最先端の研究・活動の現状について寄稿してくださっています。グラビアのページには宇宙の神秘オーロラの美しい写真がトップを飾っています。

先日、この写真を提供された奨学生、今や南極越冬隊員の任務を成し遂げ、帰国して極地研究所に勤務される鈴木裕子さんのお話を聞く会に参加しました。東京支部主催の講演会です。私自身、1992年の早春、アラスカのフェアバンクスで、天頂から降り注ぐ7色の光の饗宴「コロナ現象」を体験したことがあり、宇宙とのえも言われぬ不思議な一体感を思い出していました。しかし昭和基地でのオーロラ観察は凍傷とのたたかい、それは厳しい仕事であることを学び、立派な研究者に成長された鈴木隊員を誇らしく思いました。

育つたのしみといえば、文化事業委員会企画のコンサート出演者たちのその後の活躍にも目覚ましいものがあります。たとえば2014年秋、けやきホールでモーツァルトやヴェルディのオペラの名曲を歌ったソプラノの伊藤晴（はれ）さん。その年の11月に「ラ・ボエム」のムゼッタ役でデビューし、昨年の1月には「椿姫」のヴィオレッタ役で東京文化会館大ホールの観客を魅了しました。ついで「愛の妙薬」のヒロインを演じ、今では悲劇も喜劇も変幻自在、藤原歌劇団の押しも押されぬマドンナとして大活躍なさっています。

東京支部と本部委員会を合わせると、年間どのくらい講演会や公演、勉強会などがあるでしょうか。どれも魅力的な企画ですが、なかなか追いつかない状況です。参加すれば必ず新しい発見があり、いくつになっても「学ぶよろこび、育つたのしみ」を実感し、幸せ感到満たされます。それだけに、より多くの方々が参加できるよう、主催者側の調整や協力など工夫が求められていると思うこの頃です。

し上げることができました。
東京支部国際奨学生は、昨年度1名の卒業に伴い新たな学生を選び、今年度はミャンマーの学生が卒業しました。若い学生の力に今後の活躍を期待しています。今回の「ともしび」の投稿特集は、「私の一冊」です。学ぶことの好きな会員が多いこの会ですので、多くの原稿が集まりました。1期2年を終えますが、皆さまのご協力に感謝申し上げます。
2020年の支部総会は、新型コロナウイルスの影響で中止することにいたしました。ご理解をお願いいたします。



港区六本木の染井吉野 (Photo by T. Sinzi)

私の一冊



〈ともしび66号〉でご案内した本企画に11編の投稿をいただきました。

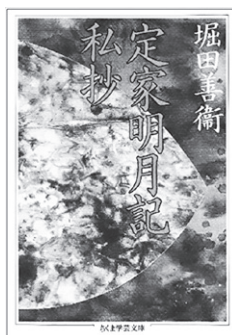
こちらにご紹介いたします。

『定家明月記私抄』

に魅せられて

堀田善衛著

齊藤智恵



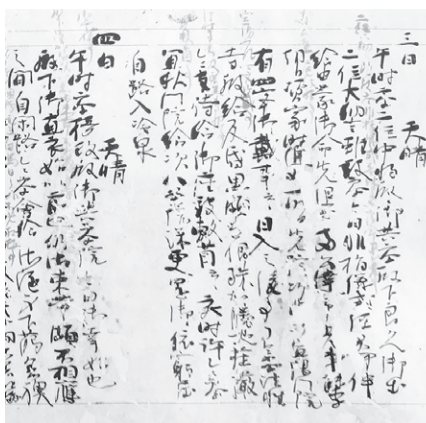
ちくま学芸文庫

学生時代、私は古代文学志向、鎌倉時代の『新古今和歌集』の技巧的な和歌は好きではなかった。しかし、鎌倉に住み「吾妻鏡講読会」に加わることで、源実朝と藤原定家が和歌を通し師弟関係にあったことを知り、その定家の日記、『明月記』の他に類例を見ない美しい名称に引かれ、偶々、天理図書館所蔵の『明月記』治承4年の記事「紅旗征戎吾ガ事ニ非ズ」の真筆に接する機会に恵まれたこともあって、『明月記』に関心を持つようになった。その頃、堀田善衛著の『定家明月記私抄』に出会い、第二次大戦末期まだ学生であつた著者が、不安な日々の中で手にした『明月記』で源平合戦などで殺伐としていた時代、治承4年(1180)に弱冠19歳の定家が「紅旗征戎吾事ニ非ズ」と中国の故事を援用、その時代の動き、また自分自身の在り様を掴みとり、かつ昂然として言い抜いていたことに愕然としたと、その序文に書いて

ているのを読んで、幼かった私を可愛がってくれた叔父(父の末弟、学徒出陣、ニューギニアで戦死)の思い出とも重なり、また、前途ある若い命を散らさざるを得なかった当時の若者たちのことを思い、胸が痛んだ。

定家の癖の多い、しかしなんとも人間味溢れる日記、あらゆることにその精力を発揮する後鳥羽天皇(後に上皇)に振り回され、しぶしぶ宮仕えをする定家の苦虫を噛み潰したような表情までが見えてきたりもするなどという描写、著者が自分の年齢に引き比べて折々に読むその感性に導かれながら『明月記私抄』に接するうちに、参考文献中の1冊、尊敬する村山修一先生の『藤原定家』(吉川弘文館)も合わせ読むようになり、その面白味の虜になった。

また、鎌倉八幡宮鶴岡文庫の講座『新古今和歌集』を受講。定家独特の幽玄の境地などにも目が向くようになった頃、「明月記研究会」にも出席する機会を得、そのときの講師の一人



冷泉家時雨亭所蔵国宝複製ハガキ(建仁三年春記)

尾上陽介先生の講座「明月記を読む」が横浜の朝日カルチャーで開講したのを知り喜んで受講。年を経て尾上先生による「御堂関白記」(藤原道長の日記)次いで一昨年には平安時代の三蹟の一人藤原行成の『権記』を読み進める契機となった。

『キュリー夫人伝』

エーブ・キュリー著 河野万里子訳

佐伯邦子



白水社

あれは遠い夏の終わりのころ、秋がすぐそこまできていたようなよく晴れた朝のことだった。確か小学校五年生、私は秋田に転校してきたばかりでまだ日も浅く、友達とよべる人もいなかった。ので、始業までの時間を自分の席で本を読んでいることが日課になっていた。この日ふいに後ろから「私も1年前に東京から転校してきたのよ。正子です」と声をかけられた。お父様が東京で光村図書に勤めていたのを辞めて郷里に帰り、この小学校の国語の先生になったことを後から教えてもらった。「この本面白いよ。読んでみない?」それは子

供向けの伝記本で、中には木陰のベンチに座っている優しそうな女の人和子供二人の絵が描いてあった。黙って受け取り放課後家に帰ってから一気に読み終えた記憶がある。

ポーランド出身の一人の女性が科学者として二度もノーベル賞を受賞し、その上二人の娘の母であり、研究室にあっては沢山の子弟を育てた教育者でもあったことを知り、胸の中が不思議な感動でいっぱいになった。すぐに、この人の娘エーブ・キュリーの書いた白水社発行の本を図書館で借りて、丁寧に一字一字読みなおした。そして、それから、その人はいつも私の心の中に入り込んだとき、黙って忍耐と希望の道を示してくれる生涯の師となった。

1998年、私は「キュリー夫人ラジウム発見100年記念カンファレンス」に高校理科の教師として(社)放射線教育フォーラムから派遣されてフランスのパリ大学に行く機会にめぐまれた。パストール研究所の隣に往時のまま保存されている彼女の実験室を訪れたとき、実

験台の上には今すぐにでも彼女が実験を始められるように実験器具やノートが置かれ、彼女の眼鏡や



キュリー夫妻の像の前で(キュリー研究所にて)1998.11.5

実験着もそのままあり、それから未だにガイガーカウンターで検知できるかなりの線量の放射線が出ていることに驚愕させられた。また、会議終了後他の参加者達とともにアンフェール門の近くのカタコンブ・ド・パリに夫君の棺の上に安置されて眠っている彼女の墓前で、心からの感謝の言葉を捧げられたことは本当に嬉しいことであった。あれから親友となった正子さんとは還暦の同窓会で再会し思い出話に花を咲かせて至福の時を過ごした。

43年間理系教員として学生を育て、念願の娘を授かり、その娘が現在フランスに住み、孫二人を育てながら学ぶことができるのは、この「私の一冊」に由来するのもかも知れない。

『ハル・ハウスの20年』

ジェーン・アダムズ著 縫田ゼミナール訳

福田 文子



市川房枝記念会出版部

私の一冊は1996年、縫田ゼミナール翻訳、市川房枝記念会出版部で発行されたジェーン・アダムズの『ハル・ハウスの20年』である。ジェーン・ア

ダムズはノーベル平和賞も受賞した米国の社会福祉事業家である。海外旅行の折、ロンドンの貧しい人々を見て心打たれ、シカゴのホルステッド通りにセツルメントを開設、近隣の貧しい移民の生活の改善に尽くす。また、婦人参政権運動、反戦平和運動にも取り組んだ。

この本の翻訳の一員に加わったのは、まず、1977年に会員制に改組した藤田たき会長の日本バシイワに1981年に入会して、NGOと縁ができたからである。その後、婦選会館に行く機会があり、縫田ゼミナール英語による婦人問題研究会を知り、参加。そのときテキストとしてこの本を読んでいたが、その後、翻訳本にするメンバーに入ることができた。以後、生きる指針としてきた。

一方、JAUWにも入会した私は、また違うチャンスに恵まれた。1995年、横浜でIFUW国際会議が開催された折「会場でのお手伝い募集」の箱に「写真」と入れた結果、撮影禁止の開会式でもカメラマンとしてお手伝いでき、その後これが、習い、性となってしまった。

ジェーン・アダムズさんのように社会福祉の方に私の活動は行かなかったが、いろいろな会でのNGO活動に参加する原動力になっていると自認している。

写真を撮っている中に思い出深い方々と間近にお会いできる機会が出てきた。横浜会議で基調講演された緒方貞子氏には、国連NGO国内女性委員

会が担当した日本と中東女性交流の折、写真の係として、ゆつくりお話を聞くこともできた。現在、大学女性協会では「調査・研究委員会」の末席で日本に来る外国移住者の子供たちの教育問題など学んでいる。「無用の用」と我が身を励ましている次第である。

今読んでいる一冊 『越境の古代史』

田中史生著

坂上 栄美子



ちくま新書

今から40年も前のこと。冬の飛鳥を歩いた。雪も降っていた。日本最古の飛鳥寺に到着すると、高齢のご住職が飛鳥大仏(釈迦如来像)の脇にしゃべった火鉢を勧めてくださった。とりあえず大仏様にご挨拶すると、「一緒に写真を撮ってあげましょう。仏様とご縁を結びなさい」と言われたので、1400年も前からおわすご本尊の前に立つて、私は写真に納まった。その頃は、古代史には疎く、文庫本の『万葉集』をポケットに持っていた。今から4年前のこと。九州国立博物館で、韓扶餘市の百済王興寺址から発掘された舍利容器が展示されること

を知り、思い立って見に行った。展示の説明書で、飛鳥寺と王興寺の建立の関係のおおよそが分かった。4年前も日韓関係が色々と難しいなか、韓国の超一級の歴史資料が日本で展示されるということに胸が熱くなった。

そして今、私は一冊の本を読んでいる。『越境の古代史』という。アジアから倭と呼ばれていた頃の列島とアジアとの複雑な関係を、時代を追って検証した本である。中国や朝鮮半島は激動の時代であり、それに連動して倭も揺れ動いた。後にヤマト王権に集約されていく列島も、以前は列島各地の豪族の首長が独自にアジアの諸権力と複雑なネットワークを結んでいた。今の国際とか国境とかの概念を越えて、知識も文化も技術も物も、そして軍事も、相互に海を越えた。それには当然多くの人々の往来を伴った。

飛鳥寺建立の経緯を読んでいると、見覚えのある写真が目に入った。九州国立博物館で見た舍利容器である。飛鳥寺は6世紀末に蘇我馬子が建立したが、それには百済王から、僧侶造寺技術者・仏舍利などの提供を受けたと『日本書紀』に記録がある。今世紀初めの百済王興寺発掘調査により、両寺は同じように木塔を持ち、その心礎に舍利容器が納められていたことが明らかにになり、飛鳥寺が百済の強い影響下で建立されたことが裏付けられた。それは仏教に留まらず、当時の中国・朝鮮半島の複雑な国際情勢の中で国際戦略上大きな意味を持っていた。ま

た百済だけでなく、釈迦如来像には高句麗との結びつきも認められ、複雑な倭国とアジアとの関係が窺えるという。私の見た舍利容器は、そんな時代の証人だったのだ。

「なるほど」と読みながら、40年前の老僧の「仏様とご縁を結びなさい」の一言は、こういうことだったのかと気がついた。私は目と足腰の衰えを自覚しながら、これからも史跡と本を往復して古代史を楽しみたい。いつか「朝鮮半島縦断古代史の旅」なるツアーが実現することを夢見ている。

『朝鮮紀行』

イザベラ・バード著 時岡敬子訳

端本和子



講談社学術文庫

1894年明治27年冬。イギリスの女性旅行家イザベラ・バードは日本から朝鮮に発った。

彼女はこの本の序章ですぐに朝鮮人の容姿・性格について述べている。朝鮮人は隣国の清・日本人とも著しく異なっている。朝鮮人は顔立ちの美しい人種である。体格もよく、外国語を

たちまち呑みこむ知能に恵まれている。彼らには東洋人特有の猜疑心・狡猾さ・不誠実さがあり、男同士の信頼はなく、女は蟄居しており極めて劣った地位にいと書かれている。

韓国時代劇をよく見る私は大納得した。韓流スターのイケメンは韓国の伝統であった。背が高く、ほほ骨高く広くて知的な額、小ぶりの耳。貴族は唇が薄くて上品な顔。これはすべての韓流スターの特徴である。ただ、下層民はふっくらした幅広の唇、ああ、これもそのとおり、庶民はみんなそんな顔。本の挿絵は正確に写生され、写真もその当時の韓国。政治・文化・街並みなど詳細に書かれている。

そしてイザベラ・バードはソウルを出ていよいよ朝鮮を旅するのであるが、清国の従僕をつけてくれたのは宣教師であった。

朝鮮は1876年まで鎖国を保っていたが、日本との条約が調印されると、あつという間に諸外国の代表がソウルに居を構えた。アメリカとフランスは宣教師ばかりであった。彼女はその宣教師の助けを借りて、朝鮮を旅することができた。その旅は朝鮮半島ソウルから平壤を中心としたものであった。

また、この本には朝鮮の女性の地位、朝鮮史の暗部という章もあり、李朝鮮の女性問題も描かれている。女性蔑視が詳細に描かれている。それは韓国の階級制度も示し、今も韓国には深層から女性蔑視が消えていないと韓

国のドラマを見ていると納得する。女性には殴られ、ひどい嫁いびりにあう。それもこれも李朝鮮時代の残滓なのか。韓国に根付く儒教の弊害はここからと胸が痛くなる。

李朝鮮時代のおすすめ韓国ドラマは「ホジュン」「イ・サン」「チャングム」「トンイ」。

思い込みの解消

『フェミニズムはみんなのもの
「情熱の政治学」』

ベル・フックス著 堀田碧訳

菊地康子



新水社

「フェミニズム」の意味を理解したのはこの本に出会ったからである。女性の社会進出が少なかった時代を過ごし、「女性の地位向上」を願っていた若い頃「フェミニズム」の文字に憧れながらも本当に目指している方向を知る機会がなかった。故に偏見もあった。フェミニストとは、男のようにになりたいと思っている怒れる女の集団だと思っていたのだが、人権に関わることで女性たちは平等の権利を求めていることが分かった。深い知識もな

いま言葉だけが独り歩きしていた。著者のフックスはアフリカ系アメリカ人女性の思想家・教育者である。著書の中に「性に基づく差別や抑圧をなくす運動であり、女性も男性もお互いに支え合い人間として互いに尊敬することがフェミニズムの目指すものである」と書かれている言葉に注目した。大学の生涯学習センターの授業を通して「女性学」を学ぶ機会が与えられてこの本に出会うことができたのである。

特に印象に残った11章は、「暴力をなくす」である。様々な場面に現れる暴力は、より力を持つものが強制力を使って支配するのは当然だという男性支配社会の性差別的な考え方に関係がある。家庭内に起こる暴力、それは夫から妻へであろうと、母親から子どもに対してであろうと、背景には同じような考え方が存在するのである。しかし、フックスは「フェミニズム運動はあらゆる形態の暴力をなくすという高い目標を持つべきだ」と主張している。束縛ではなく、思いやりに満ちた生活へ導いてくれるのが本当のフェミニズムであり、目指すものであると教えられ目から鱗の落ちた思いであった。

たのは、一冊の本『フェミニズムはみんなのもの』との出会いによってである。思い込みから解き放たれ、もっと自由に前向きに生きてよいのだと励ましを与えてくれた大切な本となった。

『源氏物語』

紫式部著

横橋 貴子



小学館

私にとつての『源氏物語』は、テーマ「私の一冊 自分のものになった一冊」には程遠く、読み進む度に「これは何、どうして」と考えさせられます。

源氏物語との出会いは、今から24年前、東京支部で『源氏物語を読む会』が始まるので参加してみたいと誘われたのがきっかけです。それまでは古典の授業で習ったのと現代語訳でストーリーをやっと追いかけてながら読んでいただけでしたが、坂上先生から「まず本は買わずにコピーで『桐壺』の巻を読んでみて、続けられると思ったら参加してください」とのお話があり始めてみました。

雅な文体、ドラマチックなスタートで素晴らしい作品と感じましたが、なによりオーソドックスな解説（テキストの本文の上下に解説と現代語訳がついている）とは一味違う坂上先生の丁寧で奥深く軽妙な解説に魅了されました。閉ざされた世界にいながら知性と才覚で生き抜く感性豊かな女性たちを先生は生き生きと解説して下さい、社会的背景、風習、景色や装束等々の説明があり、また出席者からの質問も現代社会の感覚と入り交じったり、登場人物になりきったものだったりユニークで、それに対する先生の答えも決して「これは物語ですから」と流さずに丁寧に答えて下さいます。なによりもこの先生の解説のお陰で、すっかり『源氏物語』について学ぶ楽しさを覚ええました。一ページずつ納得して味わいながら読むのは面白く、15年の歳月をかけて読み通しました。

「源氏物語のどこが面白いの」と聞かれると、なんと行ってよいのかわかりません、全部面白いのです。まるでミステリーを読むかのようにこれは何、どうなるのかとページを追ってしまします。14年をかけて一応読み終わりましたが、この会も終わるかと思ったら、なんと多くの方がもう一度読んでみたいと思つたのです。先生にお願いして二回目が始まりましたが、一度目とは違う疑問や見方が出てきて今度も前回に負けず面白いのです。『源氏物語』から古代史、宗教観、民俗学のような所へと広がるこの授業は、私にとってなによりの

楽しみとなっています。このように源氏物語は個性的で知識豊富な方々と楽しむ機会をくれた「私の一冊」です。

『スウェン・ヘディン探検記1』

アジアの砂漠を越えて上

スウェン・ヘディン著 横川文雄訳

向後 紀代美



白水社

「われわれはいよいよ深く、未知の砂の海に入って行った。生きているのはなにひとつ見えない。ただラクダの鈴が鳴らす単調な響きだけである」中学時代の図書館でのこと、学校と家を往復するだけの単調な日々の私を遠くの未知の世界へと誘ってくれたのは、スウェン・ヘディンのタクラマカン砂漠横断記であった。

スウェーデンの探検家・地理学者である彼は中央アジアの地図の空白地帯を踏査し、楼蘭の考古遺跡、さまよえる湖といわれたロプ・ノールなどを発見して多くの謎を解いたことで知られる。

特に1985年のタクラマカン砂漠で九死に一生を得た話は有名である。

この砂漠は日本とほぼ同じ面積があり年間降水量は10〜20ミリ、蒸発量は3000ミリという過酷な乾燥地。4月10日、メルケトを出発して10日後、水不足に気づく。しかしもう戻ることもできず、そのまま東へと突き進む。地図の誤り、現地の案内人が命令どおり水を補給せずヘーデンもチェックしなかったためである。

ラクダが次々と倒れ、渴きの苦しみのあまり、鶏や羊の血を飲もうとし、ラクダの尿までなんとか口にしようとして却って体力消耗、人間まで一人ずつ倒れていった。そしてヘーデンだけがコータン・ダリヤの河床にたまっていた水際にたどり着く。

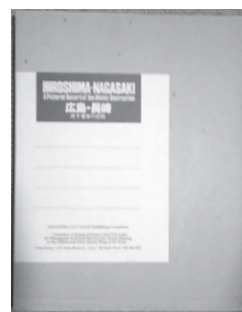
しかし、水を飲む前に脈を測定。ここがすごい。死の間際であっても科学者であることを忘れない。思いきり水を飲んでから、最後までついてきて向こうの森で瀕死状態で横たわっている従者に水を運んでやることを思いつく。しかし容器がない。そこで履いていた長靴に水を入れ天秤棒につけていく。その応用力も素晴らしい。

彼から学ぶことは、偏見のないこと。人種や宗教を超えて、個人として現地の人を評価。ラクダさえも一頭ずつ個性を記述している。

これぞその後の私の人生を指し示してくれた一冊である。

『広島・長崎 HIROSHIMA-NAGASAKI』

ときえだひろこ



HIROSHIMA-NAGASAKI
PUBLISHING COMMITTEE 刊

この写真集(350ページ、225mm×285mm、英語版)の初版は1978年5月5日、発行所は東京都港区芝1-4-9平和会館です。この本には1945年の戦時被爆の現場写真(300ページ、撮影者21名)に加え、被爆生存者の生活、被爆死者の慰霊行事、戦後の都市復興、太平洋上の1954年3月1日水爆実験による第五福竜丸船員の平時被爆等の写真も収録されています。再版は1980年4月(1冊の実費1万円)、「子どもたちに世界に／被爆の記録を贈る会」により、ある日、私共の息子(当時12歳)にも届けられました。

それ以前から、いわゆる「鍵っ子」でした息子の招きに応え、級友たちがほぼ毎日、放課後一旦ご自宅に帰ると直ぐに、「エダちゃんの家」に集まってくださっていました。ほぼ6名のお客様(女子3人、男子3人)が、宿題も必ず片付けるサロン(DKにつづく六畳間)に、良きような読み物とおやつを用意

しておくのが、「共働きママ」の役目でした。このなりゆきで、7人の子達は、最初は「皆で見ればコワくない」と、次には独りでも、この世紀の記録写真集を見ることになりました。今にして思えば、この小学校6年生たちは、ただコワがつていたのではなさそうです。この本の読後感を言葉として聞いたのは1名(数学者)のみからですが、6名様の50歳代に入った近況にも、一冊の本の影響を深々と、私自身とも共通して感じるのです。具体的には保育士、主婦(既に孫もいる)、警察官(娘あり)・・・以上は女性、男性は農業経営(家業持続)、ホテル経営(日本海側外国から来客多数)、エンジニア(日本人のノーベル賞クラス技術の実用化)として、7人全員が「世界平和に役立つ、よい生き方」を考えています。

英訳『枕草子』

清少納言著アーサー・ウェイリー訳

加納孝代



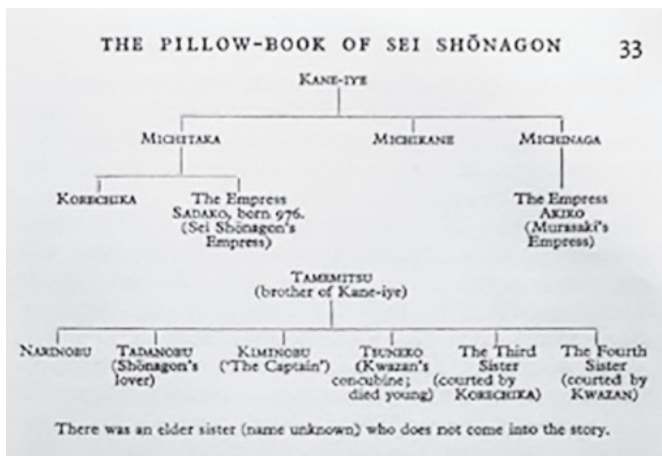
Unwin Books

イギリス人アーサー・ウェイリーが『枕草子』を英訳しています(1928)。私がウェイリーの名を知ったのは

50年も昔、1970年頃に比較文学比較文化の大学院の授業でウェイリー英訳の謡曲を読んだときです。

ウェイリーは中国古典の『詩経』や『論語』や唐詩のほか、日本古典の『源氏物語』や『枕草子』も英訳していると聞き、東京新宿の紀伊国屋書店に行くと、そこに『枕草子』の英訳本がありました。

百ページ弱の縦長のペーパーバック版、表紙の上半分には平安朝の女君の顔が緑青で描かれ、タイトルは、「ザ・ピローブック・オブ・セイショナゴン」(The Pillow-Book of Sei Shōnagon)となっていて、さらにSei Shōnagonという文字と訳者名ARTHUR WALEYが赤紫色で印字された、瀟洒な本でした。



日本の文化・文物を海外に向けて英語で発信する試みは最近盛んですが、50年前はそれほどでもなく、私は当時『枕草子』をあっけらかんと『ザ・ピローブック』と英訳したウェイリーにその場で惚れ込んでしまいました。このピローブックは、彼が面白いと思ったところを原文から4分の1ほど抜き出した抄訳で、内容も年代順に配列し直されており、結果的には中宮定子の「人と生涯」がくっきりと浮かび上がる好短編作品となりました。

ウェイリーは東洋美術を担当する大英博物館の職員で、独学で漢字を学び、続いて日本語にも興味が広がり、次々に中国と日本の古典を読んでは、それらを英語に訳していった人です（1889～1966）。

それまで日本の古典を英語で読むという発想をしたことのなかった私にとって、英訳『枕草子』を読むことは、自分が半分ウェイリーになって外から日本の平安朝の宮廷の日常をのぞくような経験でした。そこに広がっていた、男も女も、先輩も後輩も、目上・目下もお構いなしに、自分の知識と機知を駆使して自由闊達に語り合う世界がなんと面白かったか、また定子中宮や彼女の兄伊周の没落のありさまがなんと哀れだったか。

英訳『枕草子』はその後の私の比較文学比較文化研究活動の原点となりました。

※写真は本文中唯一挿入の登場人物関係図

『戦史上・中・下巻』 トゥーキユディース著久保正彰訳

M.K.



岩波文庫

27年間にわたって戦われたペロポネソス戦争（BC500年代）の記述です。ペルシア戦争に勝ち、史上第二次世界大戦後のアメリカ合衆国以外比較する国がないと言われた強国アテーナイが、なぜスパルタを盟主とするペロポネソス同盟に敗れたのか、それを把握するためと言える筆致が続き、歴史の流れが見えてくる感があります。

著者トゥーキユディースは開戦当初成人しており、後アテーナイの將軍となり、敵将ブラーシダースと戦い、敗れ庶民に落とされた貴族階級の人とされています。双方準備万端で始まった大戦の長期化を予想し、記録を始めたと言われます。現代のアメリカ合衆国を中核とする海洋グループを思わせるアテーナイ同盟と、中国、ロシアを中核とする大陸連合を彷彿とさせるペロポネソス同盟の戦いの記録は、人類がこの2500年間ほとんど変わっていないことを思い知らせます。現代のペロポネソス戦争が起きた

らどのような結末を迎えるのか、ある種の感慨を覚えます。

要所に入る「論争」は、現実になされたと思わせる説得力を持ちます。中盤の「メロス島の対話」は有名です。大国が力で圧倒する際の常套的な論理展開と言えるでしょう。メロス島の対話から抜粋します。頭のアはアテーナイ、メはメロス島です。

メ「諸君が支配者となることの利はわかるが、奴隷となる我らも利があるというのか」

ア「諸君は最悪の事態に至らず従属の地位を得られ、我らは搾取できる」

メ「我らを敵でなく味方とみなし、平和と中立を維持するという条件は受け入れられないか」

ア「諸君から憎悪を買っても我らは痛痒を感じないが、我らの弱体を意味すると思われるのは迷惑」

従属を拒んだメロス島はアテーナイ勢と戦い、滅ぼされ、成人男子は全員殺され、婦女子は奴隷となってこの部分の戦いは終わります。

27年間にわたって続けられた戦いは最後にアテーナイの降伏によって終わりますが、「戦史」は21年のところで終わっています。著者の死によると言われています。無謀なシチリア遠征が体力をそぎ、モラルの低下を招いたことはわかりますが、最後までわかりません。その後調べてみると二重の防壁を巡らし閉じ籠ったアテーナイは、裏切りと疫病で内部から崩壊したと

されています。

この最中にソクラテスやプラトンが生き、パルテノン神殿が築かれ、今日ギリシア文化と言われるものが花開いていました。一方で収奪と生贄を捧げる世界も進んでいました。勝ったスパルタもその後奢侈に溺れギリシア世界は崩壊、辺境の地からマケドニアが勢力を持ちヘレニズムの時代に進みます。

著者がどのように最後を記述しようとしていたのか気になります。著者は全てが終わってから、記録を元に一気に書き下ろしていったと思われるからです。

ものを書くという行為は自ら理解するためと、人に伝えるためという二つの面を持ちますが、この本は前者の典型だと思います。

（賛助会員）

本号へご投稿をくださった皆様に、心から感謝いたします。それぞれが奥深い内容で、皆さまもお読みになって心琴に触れられたのではないでしようか。この特集が人生を豊かにすることにお役に立てれば幸いです。

◎これからも投稿をお受けします。皆さまにお伝えしたい「私の一冊」がありましたら、どうぞ東京支部までご一報ください。

講演会報告

南極観測第58次越冬隊員 鈴木裕子氏の講演を聞いて

宇宙と地球を近くに感じられる場所・南極

情報・システム研究機構国立極地研究所
広報室特任専門員

講師 鈴木裕子氏

南極越冬隊員募集の書類から「男子に限る」という文字が消えたのは、1980年代後半でしょうか。今では、越冬隊の生活も広く知られるようになり、女性隊員がいることも不思議ではなくなりました。しかし、1年以上、極寒の閉ざされた南極での生活はまだ宇宙空間同様に過酷な世界です。

今回の講演者・鈴木裕子氏は南極へ出発する前年まで、私たちの「NPO法人富士山測候所を活用する会」に参加し、2011～2015年夏の富士山頂で雷やスプライトの観測を行い、時には御殿場基地で観測裏方の仕事も手伝うアクティブな仲間でした。夏でも氷点下になる富士山頂は一種の極地で、悪天候下の登下山は気を抜けませんが、多くの発見もあります。その経験が「雷の発生が少ない」とされていた南極が、実は違うのではないかということで発足したプロジェクトに、参加したいという彼女の熱望に繋がったようです。

南極の夏(12月から次の年の2月まで)は100人以上が昭和基地に滞在していますが、3月以降になると夜がだんだん長くなり、鈴木さんの属していた「宙空圏」グループの観測が本番を迎えます。第58次の越冬隊員は33名、それぞれの専門は違いますが女性は6名、過去最多だったそうです。

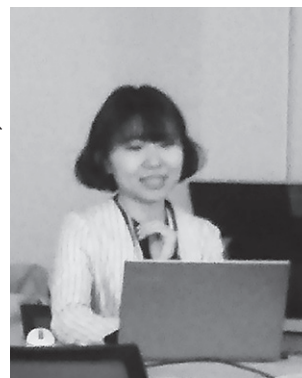
話題は、南極観測全般にわたり、夏の間しか船が接岸できないために越冬隊が必要なこと、南極大陸の地理、南極観

測の歴史に始まり、昭和基地の生活、白夜から極夜に至る変化、ドームふじ(3800m)への小旅行。お湯をまくと一瞬に氷ができて花火のように広がって輝く話。蜃気楼、ペンギンやアザラシの子育ての話、消火訓練や極夜でLEDの光で育てたイチゴの話など、1時間半の講演が短すぎると感じるほどでした。

8年前に初めて鈴木さんに出会って以来、孫の世代の頑張りをほほえましく眺めていたが、いつの間にか自分の言葉で「南極観測の重要性を一般の方々に知らせる」広報室員として、頼もしい社会人に成長したことに感動しました。これも偏に「大学女性協会」の皆様のおかげと感謝申し上げます。

※11月13日 於津田塾大学
千駄ヶ谷キャンパス会議室
参加者21名

認定NPO法人富士山測候所を活用する会・理事
土器屋由紀子



勉強会報告

エピソード入り画像で観る

AIとは何か？

しんじ たかこ

講師 進士 多佳子氏

人工知能はどのような人々が研究し、何が可能になったのか？

10月26日午後、東京支部では、支部委員で「知恵の継承研究所」代表の進士多佳子氏による「AIとは何か」と題する勉強会を開催した。

講演は、AI開発の先駆者達のエピソード入りの画像をもとに進行し、その中に女性も二人登場していた。1843年世界初のプログラムを書いたエイダ・ラブレスと、1886年に「フランケンシュタイン」を執筆したメアリー・シェリーである。1960年代に入ると、カレル・チャペックやアイザック・アシモフにより「ロボット」が登場する。続いてフォン・ノイマンがプログラム内蔵式のコンピューターを提案、アラン・チューリングがこれを掘り下げて人工知能という概念を提案し、AI能力計測の素ができた。

やがて人間の脳神経の情報の伝達を模した人工ニューラルネットワークの研究が深まり、AI自身が学ぶ「ディープラーニング」が開発された。現在、目覚ましい発達をしているのが「画像認識」である。機械に「目」を取り組むことで、人間しかできなかった仕事が肩代わりされつつある。遠隔でミサイル攻撃をするドローンに應用される一方で、危険な重労働の現場で働くロ

ボットもできた。一般の生活空間でもAIは広がっている。シंगाポールでは、無人の全自動コンビニが実用化されている。また、耳の役割の「音声認識」、話したり翻訳したりといった「自然言語処理」も進んでいる。残された領域は嗅覚と味覚とのことである。更に、10億通りの計算が瞬時にできる量子コンピューターの実用化が目前だ。同時に、2029年にはコンピューターが人智を超え、2045年には全人類の総和を超えて制御できなくなる「シンギュラリティ」の問題を予測している人も多い。

講演後の話し合いでは、AIのデータに、人間の感性やモラル、女性の視点も入れることが必要である。倫理の面からの待ったをかける法律や、人間による制御機能も欠かせない等々、白熱した話し合いが続いた。

※於本部事務所 参加者21名
(支部委員 野瀬久美子)



●驚見会長のメールから

今日はありがとうございました。知的刺激を受けました！

AIの時代にはもう彼岸に行っているとは思いますが、科学は平和と福祉に役立ててほしいと強く願います。ノーベル化学賞、物理学賞、医学賞の受賞者たちは、かならず若いころ歴史や哲学、文学、芸術にふれていたことが科学的思考に役だったと語ります。想像力を養う人文科学をおろそかにしないよう、文部科学省に提言したいですね。

講演会報告

源氏物語を読む会主催

「古代日本の宮廷儀礼と馬」

講師 柳沼千枝氏
(横浜市歴史博物館主任学芸員)

『源氏物語』を読むとき、歴史の知識の無さに立ち往生することがある。

光源氏は母の実家に政治力がないために天皇になれない立場の皇子だったが、数奇な運命に導かれ39歳で准上皇として栄華を極める。そのクライマックスの場面で、源氏は2万坪という壮大な邸宅六条院に天皇と上皇の行幸御幸を仰ぐ。馬場には左右の寮の馬を牽き並べ、近衛が立ち添う作法は、宮廷の五月の節会と見まごうばかりだったとある。私邸で宮廷に倣った馬の儀礼を催すのは、どのような意味があるのかと疑問を抱き、古代日本宮廷儀礼と馬について、柳沼千枝様に講演をお願いした。

馬は太古から野生として列島にいたわけではなく、4、5世紀頃に朝鮮半島から馬と飼育・調教・乗馬技術者が導入された。そして、古代国家によって管理され、乗用・駄用・農耕用に用いられ、特に戦闘用の騎馬として重視された。その後、変遷を経て8世紀後半から9世紀頃に、中央政府直轄

の勅旨牧が信濃・上野・甲斐・武蔵の32カ所に設けられた。そこで生産された馬は天皇の馬として中央へ送られた。天皇に貢上された馬は、次第に儀式の中に取り入れられ、八月駒牽・端午節会・白馬節会などの宮廷儀礼となっていたという内容だった。

文献に基づいた詳しい内容だったが、初学の者にもよく理解でき、『源氏物語』のためにも多くのヒントを頂いた。千年も前の物語を読むことは、分からないことの方が多いが、少しずつ理解を深める楽しみは、また作品の魅力でもある。『源氏物語』のその場面でもう一度、その儀礼の意味を咀嚼したいと思う。

10月16日 於津田塾大学千駄ヶ谷キャンパス会議室 参加者39名
(源氏物語講師 坂上栄美子)



「猫と土堀」水墨画 早川恵子（東京支部）作

会員寄稿

武道館で

上野千鶴子氏の祝辞を生で聞く

平田恭子

これは息子自慢なのですが4月12日、東大の入学式に参列しました。そしてこれは息子自慢でないのですが、一浪だったため、現役合格のお宅のママ友に紅白饅頭は買えない、武道館祝チョコレートならあったと聞いてから行きました。祝辞のことなど私の頭の片隅にもありませんでした。

来賓の紹介を聞き、〴〵え、どうせまた何でもかんでもフェミニズムに結びつけた話なのだろうな〴〵との先入観いっぱい聞いて聞き始めました。始めの数分で、すぐに、公正と信じていた試験がそうでなかったとしたら、と東京医大の女子受験生への不正差別の話に続いたので、ああ、やっぱり〴〵と思いました。が、これは佳境部分への伏線でした。祝辞の終わりに、その素晴らしき内容に、私は深く感動して手を高く掲げ拍手をしていました。隣の席の、見知らぬお母様は泣いていました。便利な時代になり、あの祝辞もインターネッで読み返せます。心に響いたところをあらためて追ってみました。

「息子は大学まで、娘は短大まででよいと考える親が娘の翼を折る」という話の時点では、〴〵そうかなあ、ちよっと古い事を言っている〴〵と思って聞いていました。我が家の周囲ではその説の

とおり、同じ塾の女子達に対して、ガツガツ勉強し合格枠を奪わないで、今のうちにA君やB君(優秀で人格者の級友)をゲットしておけばいいのにと陰で言っていた男子もいたけれど、せっかく入ったのに息子の彼女が東大生じゃないと嘆くママ友も結構いて、まあ、それどころかと思うけど、などと思い巡らしていました。合コンで東大の男子学生はモテるとの仰せに(夫はなぜか否定!)、モテるのは結婚でだと思いうけど、男性も連れて歩く女性とは別なのと一緒で、これは男女同じ、妙に平等だと内心、反論していました。

しかし、この先、胸を打つお話が続きました。「頑張ったら報われるとあなたがたが思えることそのものが環境のおかげだったということを忘れないようにしてください」というくだりで引き込まれはじめました。更に「あなたたちの周囲の環境が(手を持って引き上げ)と、子供がいなくてもこの一節が書けるのは凄いと感心し、トドメには、「がんばりようにもがんばれない人がある」「恵まれた環境と能力を、恵まれないひとびとを貶めるためにではなく、助けるために使ってください」という言葉の素晴らしさに圧倒されました。

祝辞最後の「たとえ難民になっても生きていける知を身につけてもらいたい」「知を生み出す知を身につけてもらうことが大学の使命、ようこそ東大へ」の時には、私の頭の中から上野千鶴子さんへの偏見とチョコレートは吹き飛んでいました。

2019年度

東京支部奨学事業報告

東京支部チャレンジ奨学生報告

東京支部国内奨学金(通称チャレンジ奨学金)は、2年以上の就労経験の後、大学に学ぶ3年生1名(女子学生)を支援する奨学事業です。奨学金は20万円です。

応募者の中家晶瑛さんの応募書類を評価して、奨学生にふさわしいと全委員の意見が一致しました。11月30日に事務所で奨学金を贈呈し、委員と懇談しました。

【中家晶瑛さん】

なかいしやうえい

奨学生は中家晶瑛さん(お茶の水女子大学文教育学部言語文化学科中国語圏言語文化コース3年)です。中家さんは中央大学商学部経営学科を卒業後、2年間航空貨物を扱う会社のカスタマーサービスの部署で電話対応などに従事しました。その中で、日本語の堪能な外国人と接する際、言語表現や話の進め方などに、日本の社会や文化にそぐわないことが間々あることに気づきました。相互の意思疎通のためには、相手の国の文化や価値観を受容することの必要性を感じ、日本語教育学に興味を持つようになり、お茶の水女子大学3年次に編入しました。入学後は、日本在住の中国語話者の子

どもの日本語習得に関心を持ち、彼らの一助になる研究をしたいと学んでいるとのことでした。

4月11日の支部総会において、皆さまにご紹介します。



サルさん寄贈のミャンマー民族衣装の中家さん

東京支部国際奨学生報告

東京支部国際奨学金は、日本以外の国籍を持ち、その国の高等教育機関で学ぶ女性2名に、年額4万円を正規の卒業まで支給するものです。日本側の紹介者と奨学生が連絡できることを条件として、奨学生との交流も心掛けています。昨年度でフィリピンのレンリン・パンドン・サプルさんは卒業につき、支援は終了しました。今年度は、ミャンマーのサル・ギー・ムーさん(Hsar Gay Mue)とフィリピンのバネッサ・ユバネス・マサムロックさん(Vanessa Ybanez Masanloc)を支援しています。二人の近況を報告します。

【サル・ギー・ムーさん】

日本側紹介者は向後紀代美会員です。向後さんは昨年10月にご自身が活動されているNGOの仕事でミャン

マーへ行かれ、ヤンゴンでサル・ギー・ムーさんに会い、奨学金を手渡ししてくださいました。向後さんに託して、民族衣装の寄贈がありました。サルさんは1月5日に卒業され、新しい人生に向かって努力されています。お礼のメールと卒業式の写真が届きました。



卒業式のサルさん

【バネッサ・ユバネス・マサムロックさん】

バネッサ・ユバネス・マサムロックさんは、9月の募集に際し応募があった新しい奨学生です。日本側の紹介者は、NPO法人「ピラーンの医療と自立を支える会」の山崎登美子さんです。



バネッサさんはフィリピン・サルガニ州の出身で、私立ジェネラル

サントス・ファンデーションカレッジ中等教育学部英語専攻の1年生です。現地窓口のセシルさんから、バネッサさんは地域の青年リーダーで、将来にわたりピラーン民族のリーダーとして活躍してほしい人材であるとの推薦の言葉がありました。

JAUW国内奨学生東京支部報告

本部の国内奨学生の募集と一次選考は、各支部に一任されています。東京支部では、6月に募集書類を52大学へ送付しました。8月末の締め切りには21大学から22名(一般奨学生18名・社会福祉奨学生2名・安井医学奨学生2名)の応募がありました。一般は支部選考委員の選考を経て8名を、社会福祉と安井医学は全員を、支部推薦応募者として、本部へ提出しました。本部選考と理事会承認を経て、東京支部からは、次の5名が奨学生と決定しました。

・ホームズ奨学生

出町未央(津田塾大学大学院後期博士課程3年)

・一般奨学生

五味玲子(千葉大学大学院博士後期課程3年)

中村 舞(東京藝術大学大学院博士課程1年)

・社会福祉奨学生

松岡琴乃(明治学院大学3年)

・安井医学奨学生

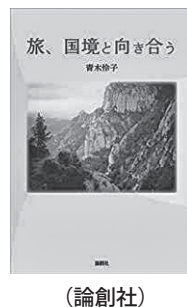
中村真理(東京大学大学院博士課程3年)

(支部委員 坂上栄美子)

自著紹介

『旅、国境と向き合う』

青木怜子



積み残した借財

本書『旅、国境と向き合う』は、過去50年、主としてIFUW時代に私自身が会議に出席するため赴き、あるいはその帰途立ち寄った近隣諸国への旅で得た知識や感触を纏めたものだ、本書の前書きで述べています。その結果、アメリカについては拙著『私の中のアメリカ』が既刊されているため、アメリカを除く国々、中でもヨーロッパ、西側を中心に、中近東やアフリカ、オセアニア等が主題として扱われました。

こうして見ると、自分でも驚くほど様々な国を訪ねたものだと思います。それでもなお、会議に参加しながら本書では主流としては扱われなかったオランダ、フランス、イギリスに加え、カナダや韓国にも触れることがありませんでした。オランダではアムステルダムを始め、グローニンゲン、ユトレヒトなど

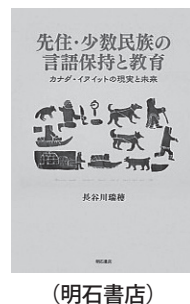
歴史的にも興味深い地域を車でも回り、イギリスではかつてローマに占領され、その遺跡となるローマ風呂を見学したほか、イングランド最南端の地デヴォンシャーも訪れ、カナダではオンタリオ、オタワ、バンクーバーや周辺の島々を何度も訪ね、そしてフランスではパリのユネスコ本部でIFUWを代表し当時の事務局長とも公式会見した記録を残しながら、それらについても述べることなく、終わっています。

さらに韓国に至っては、UWAの会議に先立ち、青瓦台に招かれて李妃鎬氏(金大中大統領夫人)にお目にかかり、そのお人柄に強く惹かれたこと、また青瓦台では韓国語のみが公式用語であるため、李妃鎬さんは英語にも日本語にも堪能でありながら、あえて私のために通訳が同席したこと、あるいは韓国への旅の帰途、扶餘や慶州などを見学し、日本との深い絆を痛感したこと、ましてや朝鮮民族分断の悲劇を生々しく実感したにもかかわらず、国境をテーマとしながら、本書ではこれらが総べて割愛されています。

つまり本書では、これだけのページを割きながら、触れるべくして触れ得なかった地域や関心事が余りにも多く残されているのです。それらについては、他事を以て替えられたかと言えば決してそうではなく、国境という重い課題に、私はまだ責務を終えていないのかもしれない。

『先住・少数民族の言語保持と教育』

長谷川瑞穂



2019年度の大学女性協会全国セミナーのテーマは「教育・ジェンダー・共生」であり、日本在住の外国にルーツのある住民との多文化共生、性差別、ハラスメントなどが議論されました。共生には、互いの言語や文化を理解し、尊重することが大切ですが、現実には言語や文化は階層化されていて、難しい問題を多く孕んでいます。歴史的に見ても、例えば世界の先住民は植民地政策のもと、支配者の言語への同化政策が採られ、彼らの言語や文化は理解も承認もされず、学校での使用も禁じられていた時期がありました。しかしながら、1960年代の公民権運動の影響もあり、1970年代からは先住民の言語や文化を尊重する動きが盛んとなり、政策的にも学校教育の中に彼らの言語を取り入れたバイリンガル教育が研究され、徐々に実行されてきました。2019年は国際連合の定めた国際先住民言語年(International Year of Indigenous Languages)であり、先住民の言語や文化の継続性の再確認を中枢に掲げています。

世界に先駆けて「多文化主義法」を発効させたカナダの大使館では、先住民言語年に因み、2019年10月29日に、カナダの先住民メティス(カナダの先住民インディアン、イヌイット、メティス)と日本の先住民のアイヌを招き、独自の舞踊披露などが行われました。筆者も研究者として、その後のラウンド・テーブル・ディスカッションに参加し、カナダの研究者、先住民の代表者と様々な議論を行いました。折しも、2019年9月に著書『先住・少数民族の言語保持と教育』が明石書店より刊行されました。

カナダの先住民イヌイットを事例として、イヌイット語の言語保持の問題を、現地調査、参与観察、文献レビューに基づき、考察しています。カナダでは、1999年にイヌイットが85%を占める新しいヌナブト準州が誕生しました。イヌイット語やイヌイット文化保持の政策も採られてきましたが、今回の研究で、現実には特に若者の英語化が進んでいることがあきらかになり、著書ではその要因も考察しています。先住民の言語や文化保持に関わる問題は、世界の先住民に共通のもです。本書が、マイノリティおよび彼らの言語保持の問題を考えるきっかけとなれば幸いです。



ラウンド・テーブル・ディスカッション

新春のつどい

楽しい交流のひとつとき

恒例の「新春のつどい」が、1月11日に京王プラザホテルで催され、91名の会員と7名の奨学生が参加し、楽しいひとときを過ごしました。第一部では、2019年度国内奨学金贈呈式と奨学生によるスピーチが行われました。スピーチでは、奨学生がそれぞれの研究内容と将来の夢を語ると同時に、大学女性協会から奨学金を受けられたことが、彼女たちの大きな自信になっていることが述べられました。スピーチを聴き、改めて本会の国内奨学生事業の重要性を痛感致しました。彼女たちは、これを機により研究に励み、日本の将来を担うリーダーとして活躍なさることでしょう。第二部の会食・懇談会では、美味な中華のランチを楽しみながら、楽しい会話が弾みました。奨学生も各テーブルに分かれ、会員との交流を深めました。また今年の福引では、全員に景品が用意され、会員はそれぞれの品を胸に、暖かく、満ち足りた気持ちで帰宅の途につきました。お世話下さった会員の方々に感謝いたします。



ホームズ奨学生 出町未央さんに
奨学金を贈呈

フラワーアレンジメント講習会

クリスマスリース作り (11月26日)

松崎和子

教えてくださいのは河井尚子講師。部屋に入るといい匂い。何かな?自然の材料でリースを作るのは初めて。ワクワク。まずは蔓でできた土台にヒムロ杉、オレゴン産モミ、ブルーアイス(いい匂いの元)などの葉をワイヤーで巻きつける。「おしゃべりしていないで、できた人は飾りをつけてください!」と先生の声。さあ、センスの見せ所!シナモンの薪、レッドベリー、松かさ、綿の実、最後にベージュ色のポインセチアの花とリボンをあしらう。できた!いい匂い!どこに飾ろうかな。



サークル案内

●源氏物語を読む会(Ⅱ)

・第二・第四火曜日

午前十時半〜十二時

・津田塾大学

千駄ヶ谷キャンパス会議室

・講師・坂上栄美子会員

・連絡先・中山律子

☎(03)3336-4628

「真木柱」を再読しています。

●源氏物語を読む会(Ⅲ)

・第二・第三水曜日

午前十時半〜十二時

・津田塾大学

千駄ヶ谷キャンパス会議室

・講師・坂上栄美子会員

・連絡先・河井尚子

☎(03)3720-0293

「野分」を読んでいます。

●水墨画教室

・第二金曜日

午後一時半〜三時半

・JAUW事務所会議室

・講師・日高絹子(絹紅)会員

・連絡先・森川淳子

☎(045)583-3430

2019年度 東京支部新入会員

奥坊光子 (津田塾大学)

(再入会)

夏瑛 (浙江大学)

加藤聖子 (国際基督教大学)

菊地康子 (女子栄養短期大学)

西尾静恵 (お茶の水女子大学)

宮原千佳子 (同志社女子大学)

*敬称略 *50音順、括弧内は出身校

お悔やみ申し上げます

草野裕子様

2019年8月20日ご逝去

ご寄付いただきました
ありがとうございました

源氏物語を読む会(Ⅱ) 一万円

源氏物語を読む会(Ⅲ) 一万円

水墨画教室 五千円

支部からの連絡

●住所等の変更はお知らせください。

●会費未納の方はお早目にお願います。

●91歳以上の会員の会費は免除することができます。支部長までお申し出ください。

●中野区視覚障害者福祉協会支援のため使用済み切手を事務所までお送りください。

《編集後記》

多くの会員の皆さまからご投稿頂き、「ともしび」67号を発行することができ、感謝申し上げます。これからも支部活動をお伝えすると同時に、楽しく、学びの多い「ともしび」の発行をめざして編集委員一同頑張ります。今後ともご投稿にご協力頂きますようお願い申し上げます。

(編集担当 桑折進士、嶋田長谷川)

ともしび 第67号 発行日:2020年3月9日

編集/発行:一般社団法人大学女性協会東京支部 〒160-0017 東京都新宿区左門町11番地 6-101

Tel:03-3358-2882 Fax:03-3358-2889 Email:jauw@jauw.org URL:http://www.jauw.org

制作協力/印刷:株式会社 繁松

※「ともしび」は会員のための情報誌です。外部に向けた転載、引用などは事務所までご一報ください。